

	学校だより 令和5年10月 No.7
	学校教育目標 ○あたたかい心 ○よりかしこく ○よりたくましく

運動会で伝えたいこと

校長 戸村達男

「スクールカースト」という言葉が登場したのはもう20年近く前のことでしょうか。同じクラスの中で、上下関係や序列が生まれてしまう現象のことを表した造語です。上位から「1軍・2軍・3軍」「A・B・C」などと呼びます。

序列の基準になるのは、コミュニケーション能力、容姿（見た目）、運動神経などで、不思議なことに学力はあまり影響しないようです。

学校では、このような上下関係や序列はもちろんよくないものとして指導をしていますが、簡単にはなくせないのが現実です。それはそうです。私たち大人社会であっても、「勝ち組・負け組」などと称し、序列化にこだわり、序列化に惑わされているのですから。

「お～い、所小っ子のみんな～。足が速いこと、性格が明るくて自己主張ができること、勉強ができること。それらはどれも、とても素敵なこと。だけど、そのことだけで人間の価値はきめられるものではないんだぞ～！！」って、大きな声で毎日言って回りたくらいです。

運動会は、そうしたことを子どもたちに伝える、またとない機会です。

徒競走で、1位となった子はもちろんすばらしい。ビリだったけど最後まで一生懸命頑張った子も、同じようにすばらしい。だから、その頑張りを思い切りほめてあげましょう。

リレーで、抜かれちゃったけど最後まで全力を出し切っているチーム、大差がついたけどあきらめずに頑張ったチームにも、1位のチームにも負けなくらいの大きな拍手を送りましょう。

台風の日実行委員で、チームのために一生懸命作戦を考えた子。

自分の組が勝つために、声がかかるくらい応援した子。

やりたかった応援団に立候補したけどなれなかった。でもめげずに用具係で頑張った子。

こうした子どもたちを、「あなたの行動は、とても素晴らしい」と大きく称賛し、認めてあげましょう。その行動は価値のあることなんだと伝えましょう。

運動会のような学校行事には、さまざまな場面や役割があります。活躍の場面も多く、だからこそ、多様な価値、多様であることのすばらしさを子どもたちに伝えることができます。

価値は多様、だからA君もすごい、Bさんもすばらしい、Cさんもすてき。ある特定の価値で人間に上下や序列をつけることは意味がないことを、子どもたちに心で理解してもらいたい。そう考えます。

保護者、ご来賓の皆様をはじめとする、会場の大人たちの大きな拍手と歓声が、頑張ることは決して「ダサい」ことでも「はずかしいこと」でもないことを、子どもたちに実感させる力となります。明日の運動会、ぜひ子どもたちに大きな応援をお願いいたします。

「子どもたちのために」が むずかしい

保護者の方から「〇〇ちゃんと同じクラスにしないでください」というリクエストをいただくことがあります。

そんな時、学校では、「できる限りの配慮は致しますが、クラスを別にするというお約束をすることはできません」とお答えしています。

相性が合わなくて、学校に来るのが嫌になってしまうほど苦しんでいるのであれば、助けてあげるべきですし、配慮は必要だと思います。一方で、このような配慮は「相性が合わない友だちとの距離感や付き合い方を学ぶ機会を奪ってしまうことになりかねないなあ。」と感じていました。

ある雑誌が最近、現代の子どもたちの人間関係について特集をしていました。その中に、次のような記述がありました。

以前の学校には、子供たちを雑多な人間関係の中に放り込み、そこで付き合い方やコミュニケーションを学ばせる機能があった。クラス替えや席替えの度に仲のいい友達と引き離され、昼休みはクラスや学年の違う子供たちと遊び場を取り合い、部活動では後輩の指導をしたりした。そこで自分とは異なる人間とどう共に生きていくべきかを学んでいった。

ところが、最近はこれと真逆の指導が主流になっているようだ。席替えはトラブル予防のために仲の良い友達同士で班を組ませて席を決め、休み時間は学年やクラスごとに遊ぶ場所を学校が指定する。万が一トラブルが生じれば、教師が即座に介入して解決する。つまり、不要な衝突を避けるために、学校側が子供たちを管理下に置き、人間関係を狭めているのである。

こうした指導は子供を不測の事態から守る面があるが、不特定多数の人間との付き合い方を学ぶ機会を奪う。もともと対人能力が高い子はいいが、そうでない子は人づきあいが苦手なままになる。

(週刊新潮 令和5年8月31日号 「短期集中連載 コロナ・チルドレン」より)

「主流になっている」かどうかについてはいささか疑問もありますが、私が以前から感じていた思いと共通する部分もあります。

一言で言うと「学校は親切すぎるかもしれない」。

これからのデジタル社会、人間関係のあり方は以前とは違ってくると思います。職場で、地域で、趣味で、それぞれの場面で、ライト（軽い）な感覚の人間関係を結んでいく方向になるような気がします。そういう意味では、苦手な人との付き合い方はそれほど深く学ばなくてもいいのかもしれない。

でも大人になったときには、人間関係を調整してくれる親も、先生も、周りにはいません。自分で人間関係を調整・構築していかなければならないのは事実です。

何が子どもたちのためになるのか。子どもたちの将来にとって、何を配慮することが望ましいのか。試練は必要なのか。その試練は今でなければいけないのか。難しいです。

運動会の競技のスタート合図について

運動会ではこれまで、競技の始まりと終わりの合図にピストルを使っておりました。児童の中には、音に敏感で、ピストルの音が苦手なお子さんや何人かいることから、今年の運動会はピストルを使わず、競技の始まりと終わりの合図はすべてホイッスルで行うことといたします。ご理解ご協力お願いいたします。

※大人になるにあたり、ピストルの音に慣れるという試練は必要ないですよ。